

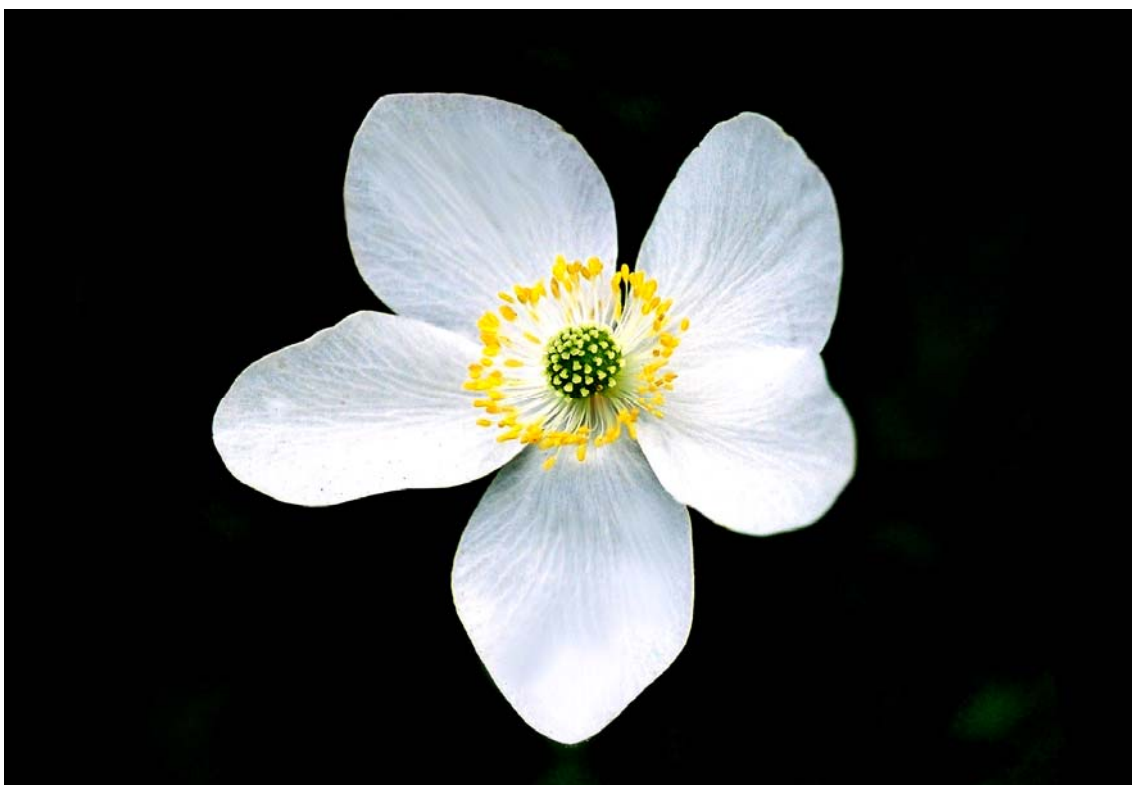
2) イチリンソウとニリンソウ＝一輪草と二輪草

イチリンソウもニリンソウも同じキンポウゲ科の多年草で、世界では 150 種類が知られ、特にイチリンソウはイチゲ(一花または一華)とも呼ばれている。高山植物のハクサンイチゲやエゾイチゲ、アズマイチゲなど、美しい花を咲かせるものも多く、登山家やハイカーにはおなじみの花で、品種改良された栽培種も少なくない。

イチリンソウは本州、四国、九州の林縁や雑木林中に生え、根茎はやや多肉質で横に這い淡白色をしている。茎は高さ 20~30cm で直立し、根生葉には長い葉柄があり、一回三出複葉で三枚が輪出し、小葉は羽状に裂ける。4~5 月ごろ花径 4~5cm の白色花を開くものの、この花には花弁はなく、花弁に見えるのは萼片で、5~6 枚が梅鉢状につく。和名の由来は一茎に一個の花をつけるため、別称としては前述のようにイチゲソウとか、キエバナ、地方によってはユキワリソウなどと呼ばれることもある。学名は『*Anemone nikoensis*』で、属名は地中海沿岸地帯に咲くアネモネのギリシャ名で「風の吹く所に好んで生える」というほどの意味であるが、その物語に関してはアネモネ(01-03-03)を参考にされたい。また種小辞は栃木県の日光で初めて発見されたことによるもので、日光にある東京大学農学部の附属植物園内には、小規模ながらこの花の群落がある。イギリスでは『one flower plant』と呼ばれ、中国では『雙瓶梅』である。しかしこれは誤用とされ、二つの瓶の花であるところから、他の花を指していたものが、流用されるようになったものと思われる。

一方ニリンソウは日本各地の山林内や山麓地帯の湿ったところに多く生え、しばしば大群落を形成し、朝鮮半島や中国東北部、アムールにも分布する。茎は高さ 15~20cm で根生葉は三全裂し、葉面には淡白色の斑点が現われる。春 4~5 月頃、総苞葉の中心から 1~3 本の花柄を出して、先端に梅に似た花径 1.5~2.5cm の白い小花を普通は 2 輪ずつ付ける。しかし 1 輪であることも、また 3 輪ぐらいまとめて付けることもある。和名の由来は花を 2 輪ずつ付けるため、イチリンソウに対するものとして名付けられた。別称としてはフクベラ、ガショウソウ、フクベライチゲなどが知られている。この植物は二枚の子葉が合着して一枚に見えるところから、「合掌草」がガショウソウに変わったものと推測される。またフクベラは「複篋」とも思える。長野県での呼称はコモチグサで、2 輪の花を親子にたとえたものである。アイヌはプクサキナと呼んでいる。学名は『*Anemone flaccida*』で、属名は前述の通りだが、種小辞は柔らかい葉のという意味である。

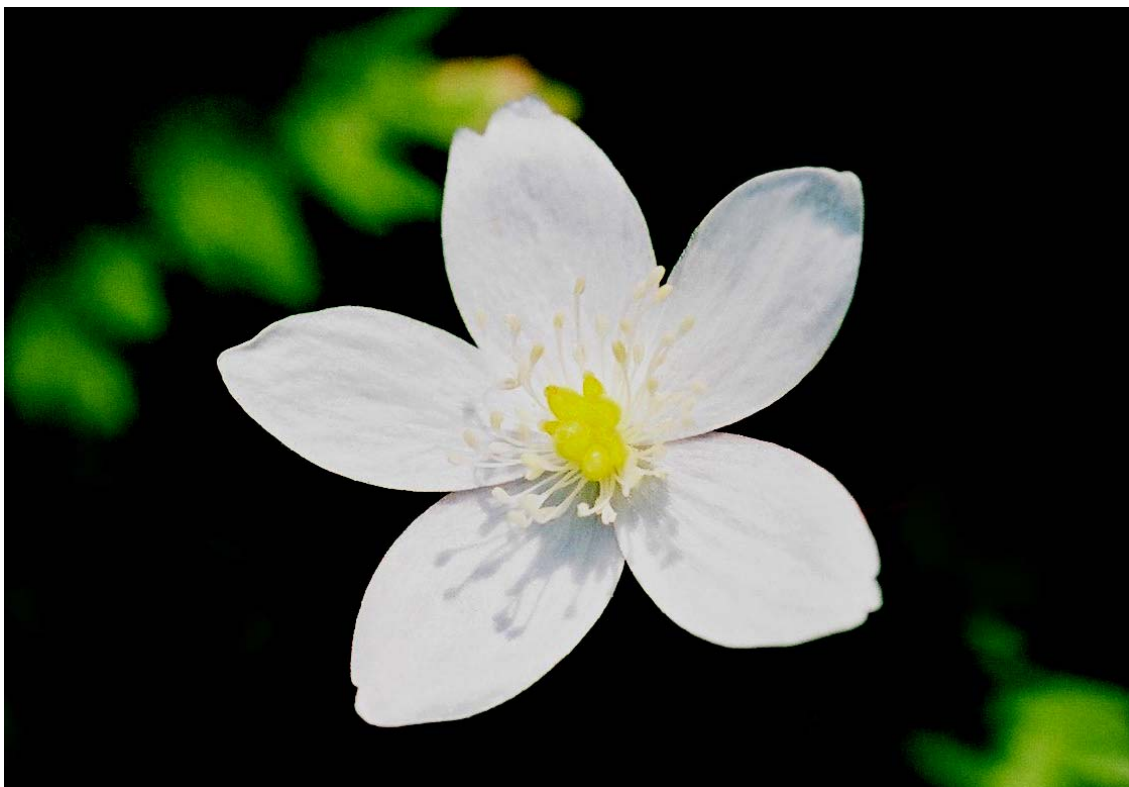
キンポウゲ科の植物は、とかく有毒のものが多いものの、このニリンソウに限っては若芽を食用にすることができる。東北地方では、浸し物にするところも多く、葉の形がトリカブトとよく似ているために、中毒を起こした例も報告されており、注意が必要である。また本種の近縁種には花の色が紫色のキクザキイチリンソウや、後述するユキワリソウ、秋に咲くシュウメイギクなど美しい花が多い。



清楚で美しいイチリンソウの花。誰が植えたのだろうか、道端の空き地でこんな可憐な花を咲かせていた。種子がこぼれたのかもしれない(埼玉県狭山市)。



この西洋種のイチリンソウは花径 5cm ほどで、満開時は見事である(埼玉県所沢市)。



イチリンソウの花(埼玉県秩父市)、疎林内やその周辺の半日陰でよく育つ。目立つ花ではないが、群落を作ることも多く、しばしばハイカーの目を楽しませてくれる。



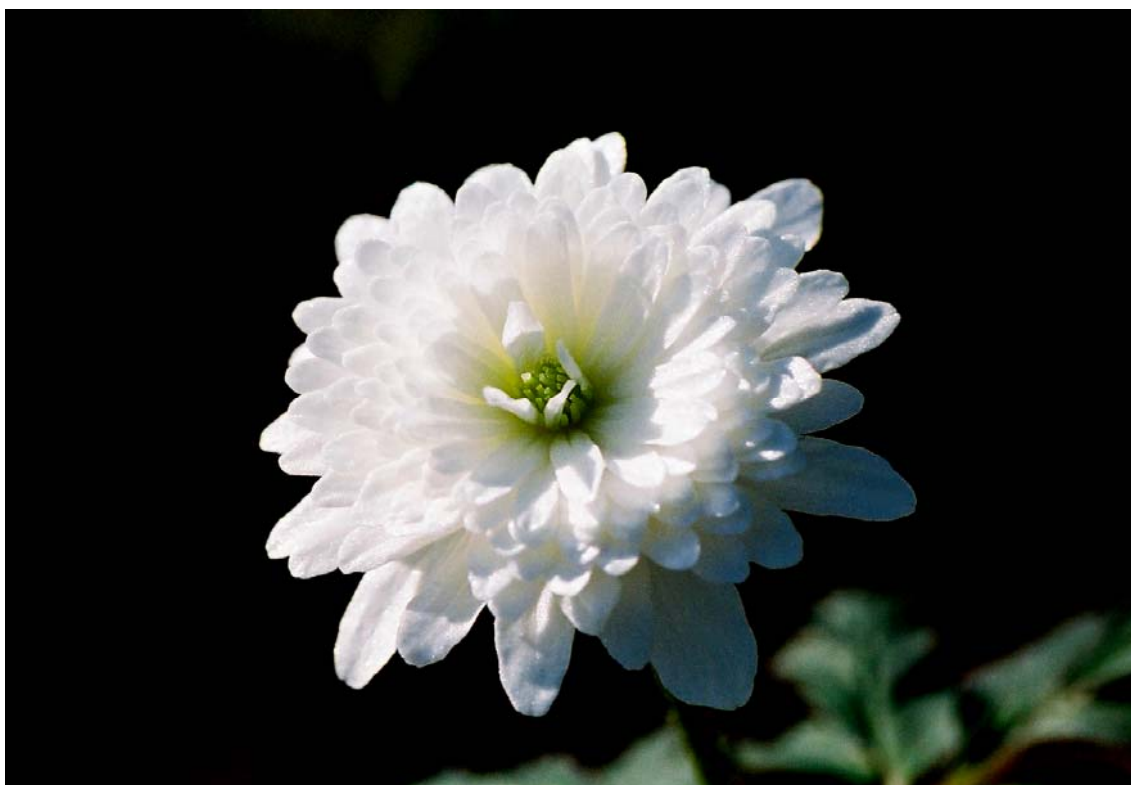
春明菊として深谷で売られていた花だが、これもイチリンソウの仲間なのだろう。



菊咲一華(キクザキイチゲ)と呼ばれているイチリンソウである。この園芸種が下記の青い花の写真で、それぞれ春に先駆けて咲き、季節の訪れを教えてくれる(埼玉県深谷市)。



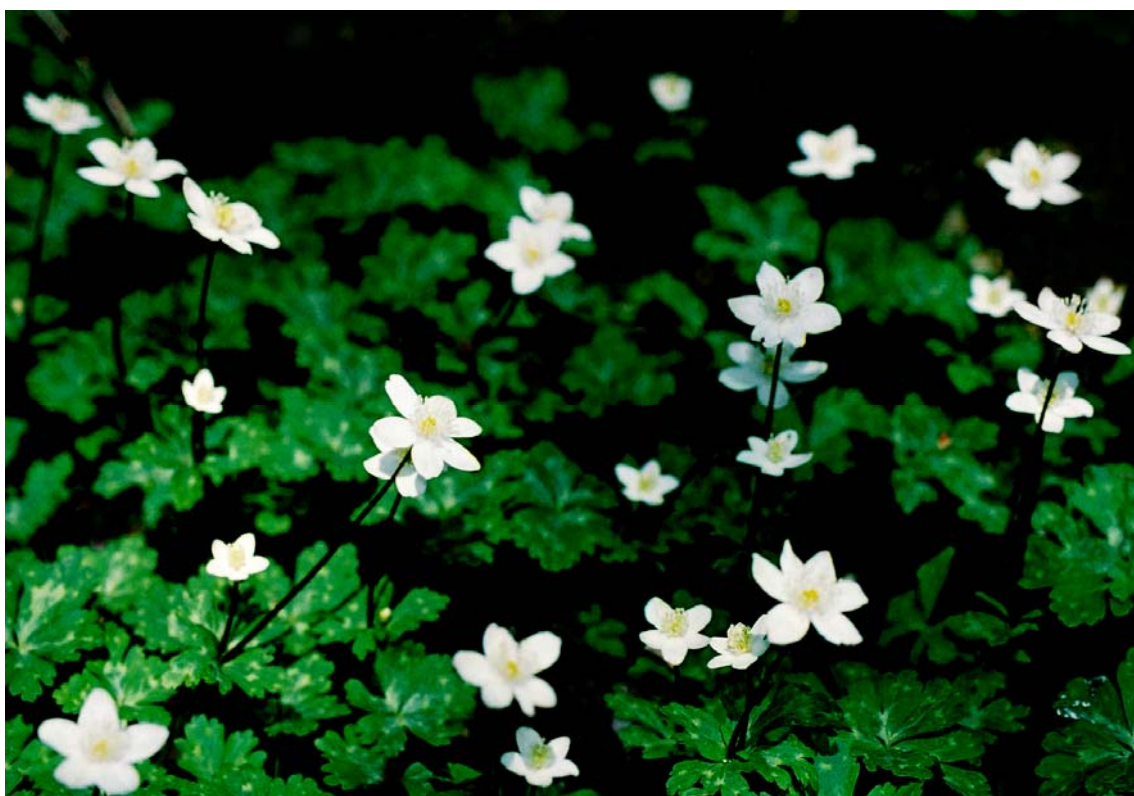
菊咲イチリンソウの花、これは野山ではお目にかかれない園芸種である。



八重菊咲きのイチリンソウの花。イチリンソウというよりもキクの花に似ている(園芸種)。写真のこの種に関してはキンポウゲ科ではなくキク科なのかもしれない。



アズマイチゲの花、梅園の下草に混じって咲いていた(栃木県葛生町)。



ニリンソウの花。古殿の山桜を撮影しての帰り道、いたるところでこの花に出会うことが出来た。このあたりでは単なる雑草でしかないのだろう(福島県古殿町)。



ニリンソウの花(栃木県日光市東京大学農学部附属植物園日光分室)。

[目次に戻る](#)